

内地・その他

戦争を挟んだ私の半生記

福井県 近藤 藤三

私は父・市蔵、母・志げの八女一男の第七子としてこの世に生を享けました。兄弟は、女子ばかりで、長姉にむこ養子を迎えようとした矢先の長男の誕生で、父母の喜びは想像に難くは無かったです。

しかし物心ついた頃は厳しい父で、あまり甘やかしてはくれませんでした。幼いながらも私の意見には、よく理解を示し、耳を傾けてくれた温和な一面をもった父でもありました。

母は特に慈悲深い人で、男子一人であったせいか常に慈しみ深い母でありました。多勢の姉達も同様に可愛いがってくれました。今思い出しても懐かしい気がいたします。

父は私の生まれる前は精米業をやっていました。使用人を雇っていました。農業もやっています。使用人は眼が悪く煙草を好んでいました。

明治三十九（一九〇六）年六月九日、風の強い日だったそうです。「キセル」で煙草を吸っていた使用人が吸い殻を落とし、土間に散らばっていた精米のモミ殻に火が付いたのが目が悪いため気が付かず燃え上がり、折からの強風で自宅から付近に延焼し、一寺十八戸を消失するという大火になってしまったそうです。

その時、父は離れた畑にいて農作業中でしたが、一目散に家に飛んで帰った時は既に棟が焼け落ち、手の施しようもなく、家財道具一切を灰燼に帰し、大火の火元ということで父は裸足、縄帯、野良着姿で村中を謝り回りました。母は長女出産のため実家へ里帰り中の出来事で、近藤家苦難の始まりでした。

その苦難に追い討ちをかけるように今までの収入を預けていた街の金融業者に北海道に夜逃げして持ち逃げされ、永年営々と貯めこんだトラの子をそっくり失って無一文になってしまったのでした。父の無念さ、苦悩はいかばかりであったかと、そのことを子供心に聞き及びました。そして、辛苦の限りの窮乏生活の連続だったと当時の事を話していました。現在も証拠の通帳が、父の恨み、無念さを残すがごとくに私の手元に保存されています。それを見るたびに一大業火の遭遇と、全財産を持ち逃げされた、父の艱難辛苦が思

いやられます。

私は昭和十(一九三五)年三月、高等小学校を卒業しました。進学したいと思いましたが、父母の苦勞を想えば早く稼いで家計を助けねばと地元の電気会社の給仕として就職しました。しかし高小卒では「うだつ」が上がらず、私は向学心に燃え、父の許しを得て東京電気学校の夜学に苦学することになりました。

父は「お前にそんな苦学をさせなくても、持ち逃げされなかつたら中学でも大学でも入れてやれたのになあ」としみじみ東京遊学の前夜、話し合ったことを思い出します。

私は上京前に甲種電気工事人免許を十五歳の時に取得していましたので、上京して昼間は東京電灯の下請会社就職しました。そして昼間は各家庭の電気配線の絶縁抵抗の測定点検をして学費を稼ぎました。一軒いくらの仕事でしたので、月百円から百二十円稼ぎ、家へも月々五十円位送ることができました。当時四十円がサラリーマンの

月給でしたので、故郷の父母は大変喜んでくれました。

夜学では電気理論、電気法規、電気機器、実験とか新しい知識を修得できました。これが軍隊で大いに役立つとは知りませんでした。

私が東京で勉学中の昭和十四年五月二十一日、父が田圃から上がってきて、寒いからと風呂に入ったところ軽い中風になり、一週間位でおさまりましたが、中風は一〜三〜五年と年を切ると言われていました。発病後、満一年と一日の昭和十五年五月二十二日に亡くなりました。享年六十二歳でした。

そして父の後を追うごとく母が同年九月十七日に亡くなりました。享年五十七歳でした。両親二人が相次いで亡くなりましたので、私は東京在学をあきらめ、Uターンして結婚して家を継ぐことになりました。十九歳の時でした。

当時、米国との交渉が暗雲をただよわせていました。昭和十六年四月に徴兵検査を故郷の公会堂で受け、見事甲種合格となりました。

十二月八日には、遂に日米開戦となり、昭和十七年二月一日、静岡県浜松市の第五十一航空師団第四航空教育団第七航空教育隊第三中隊に入隊しました。

師団長は石川愛陸軍中將です。第三中隊長は宮田金作大尉でした。部隊名は中部第九十七部隊です。浜松の三方ヶ原に兵舎がありました。

部隊は八個中隊から編成されており、一、二中隊は機関（エンジン）関係、我々第三中隊は電機関係、第四中隊はガス関係等で、歩兵部隊とは異なり、それぞれ専門分野に編成されており、一個中隊の人員は約二百人でした。

私は入隊前の職歴や学歴が電機関係だったのが見込まれて九七式、一〇〇式重爆撃の電機関係整備（発電機・蓄電池・灯器・爆弾懸吊器・爆弾運搬装着機など）の初年兵教育係を担当させられ、

初年兵の私が初年兵を教えるというところでもない役目を命ぜられたのでした。

昼間は中隊事務室で教官の指示で教育計画を立て、初年兵教育に従事しますが、夜は内務班に帰ります。

内務班には当然古年兵がおりますので、中には私に対して皮肉ったり、意地悪な言動を取る古年兵もおりましたが、班長はじめ班付伍長が私を守ってくれたので次第にそういう古兵もなくなりました。何よりも宮田中隊長殿が私的制裁に非常に厳しく指導されましたので余計助かりました。

中隊事務室では内務係准尉殿が特に私に目をかけてくれ、何かにつけて引き立ててくれました。初年兵として執銃訓練なんかも本科に較べれば、ほんの僅かでした。

第一期の検閲を終えた兵達を前線の各飛行戦隊・各飛行場大隊等の基地へ送り出す任務に就いていました。

後に中隊長に見込まれて、中隊事務室の功績室業務や週番下士官の最大業務である食需伝票の発行等、日常業務にも堪能であったのか重宝がられ、中隊事務係の准尉殿や中隊長殿の恩恵を受けて、進級は最短コースを歩み、外地へは行かずに済みました。

昭和十九年ともなると戦況も次第に我が方に不利となり始め、制空、制海権をすべて米英連合軍に奪われ、浜松市は常に遊弋する米太平洋第七艦隊の艦砲射撃の的となり、夜になってから、真昼のような、とてつもない明るい落下傘照明弾を長く宙に浮かせて、艦砲射撃をしつめます。初めは右舷の大砲から撃ち込み、それを撃ちつくすとしばらく撃ち止み、次は旋回して左舷からの砲撃です。その様相は百雷鳴動、この世の終わりと、あの時ほど肝を縮めた事は生を享けて最初で最後でした。

兵営は週番司令以下営門衛兵だけになり、全員

三方ヶ原台地から北方向、森の石松で有名な都田村に緊急避難命令で退避しました。

また三方ヶ原台地の北の方から米艦載機が群がるように飛び立つと、グラマン戦闘爆撃機が編隊を整えて我が兵舎の方に攻撃の奇襲をかけ、急降下して地上掃射を浴びせてきました。

あらかじめ掘っておいた「タコ壺」暫壕に飛び込み三八式歩兵銃で応戦するも空しく、二個中隊の兵舎が炎上、消失し、中隊を守った週番上等兵が、中隊兵舎前の側溝で焼けて白骨となって発見されるといふ、犠牲となった惨状を目のあたりにした記憶が今も蘇ります。

戦争が激しくなるにつけ、我が部隊も当時の学童疎開のように三方ヶ原台地の東方の部落の積志村や小野口村へ疎開して、公会堂などを借り受けて、そこに中隊の舎屋を設営して、食材を買い出し炊飯などをいたしました。

昭和十九年十二月一日、伍長に任官しました。そして間もなく同月末に山梨県甲府飛行場大隊へ

転属を命ぜられました。そこで我が国陸軍初の成層圏長距離飛行機の整備業務に従事しましたが、とても大きな飛行機でした。

当時、日本でも「サクラ弾」と呼ばれた原子爆弾の製造が間近で、完成すれば、それを乗せて米本土爆撃に出撃するのだと言われていました。

日本の原爆？が出来上がるのが遅かったのか、それとも研究中だったのか？ いずれにしても不使用が良かったと思えました。

昭和二十年八月十五日正午、天皇陛下の玉音放送で、日本はポツダム宣言を受諾して敗戦となり、四カ年御奉公した軍務を終え、九月三日戦意喪失の復員をしました。

二三日は呆然自失で過ごし、配電統合令で社名の変った北陸配電株式会社に復職しました。私の長男は私が軍隊にいる時に生まれましたが、終戦の一週間前に栄養失調症で死亡しました。

復員後には二男一女が授けられ、現在孫七人と

幸福な余生を送っております。

敗戦後のきびしい生活を経験し、その間、北陸電力㈱を五十五歳で定年退職しました。引き続き系列会社の北陸発電工事㈱に勤務すること七年間、その後、職業訓練校に一年間、電気工事科を学修し皆勤賞を貰いました。

その後、地元タクシー会社の集金業務を十三年間引き受けました。仕事なら貴賤なく、真面目に働くのをモットーとしています。

資格免許と電気関係、危険物関係、調理師の免許十種類を取得しました。

戦争と自分

過ぎた時間は

二度と来ない (二)

佐賀県 中島 富夫

昭和十九(一九四四)年三月二十七日、久留米に近い大刀洗飛行場と兵器廠が爆撃を受けた。防空壕の中より監視していると、上空を反転し再び攻撃姿勢に移る多数のグラマン機を発見した。そして我々の部隊の上空に飛来し機銃掃射を加えて通過して行った。

壕より飛び出し確かめたところ一列に連なった弾痕があり、拾った弾丸は一〇センチの長さのあるピカピカの機銃弾であった。警報解除と同時に再び米軍上陸の決戦に備えての戦闘訓練が続行され、水際三キロメートル以内で撃滅するための蛸壺掘り、匍匐前進、棒地雷、箱地雷による対戦車